

帯広河川事務所における 「かわたびほっかいどう」の推進について —札内川ダムを活用した飲食物の貯蔵実験等による 地域活性化の取組—

帯広開発建設部 帯広河川事務所 札内川ダム管理支所 ○中村 一貴
帯広開発建設部 帯広河川事務所 札内川ダム管理支所 黛 和希
帯広開発建設部 帯広河川事務所 三上 裕史

帯広河川事務所では、今年度、札内川ダムにおけるコーヒー豆等の飲食物の貯蔵実験を開始した。リムトンネル等の冷涼な空間を活用し、地域の事業者が製造する飲食物を熟成させ、付加価値を高めることを狙ったものである。施策の初期段階にもかかわらず、既に自治体等との連携、観光活用、ダムの広報等の観点で成果が上がり始めている。本稿では、取組の工夫点とこれまでの成果を紹介するとともに、今後の展望について整理する。

キーワード：地域活性化、地域連携、地域振興

1. はじめに

北海道開発局では、第8期北海道総合開発計画のもと、北海道の強みである豊富な地域資源とそれに裏打ちされたブランド力など、北海道がもつポテンシャルを最大限に活用し、「食」と「観光」を主要施策の一つに掲げ、2050年の長期を見据えて「世界の北海道」を目指している。

北海道開発局の河川部門においては、「かわたびほっかいどう」プロジェクトとして、川の自然環境や景観、水辺活動やサイクリング環境等、河川空間が有するポテンシャルを活用したツーリズムを平成29年度から推進している¹⁾。具体的には、川や湖などの水辺に関する情報を効果的に発信し、住民や観光客の水辺利用のサポートや各地域・分野を連携した水辺空間の創出等により、地域づくり、産業・観光振興に貢献する取組である。



写真-1 札内川ダム全景

本稿では取組の一つとして札内川ダムにおけるインフラストックを活用し、地域と連携した飲食物の貯蔵実験を紹介するものである。

2. ダム及び地域の概要

(1) ダムの概要

札内川ダムは十勝川からの合流点から上流に約60 km の日高山脈襟裳国定公園内に位置する堤高114m、堤頂長300m、集水面積117.7km²重力式コンクリートダムで、洪水調節、流水の正常な機能の維持、灌漑、電力の供給及び下流の中札内村、更別村、帯広市、音更町、幕別町、芽室町、池田町への水道水の供給を担っている(写真-1、図1)。



図1 札内川ダム及び中札内村位置図

(2) 中札内村の概要

中札内村は十勝平野の南西部、日高山脈中央部を源とする札内川流域に広がる、面積292.69km²の村である（写真-2）。

中札内村は自然に恵まれた立地条件を活かした農業、畜産業が盛んであり、商業も含め「活力ある産業の振興」を掲げ、近年は商業のほか、自然に恵まれた美しい農村景観とともに、「花と緑とアートの村」として観光にも力を入れている。

令和2年度からは国の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の基本方針に基づき「第2期中札内村まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、令和6年までの5年間で目標の達成を目指している（表-1）。

3. 貯蔵実験の取組の経緯

ダム施設内の冷涼な環境を活用した飲食物の貯蔵実験は既に他のダムで行われている。札内川ダムでは令和4年4月から、「ダムを活用した飲食物の貯蔵を通じ、地域活性化や観光振興に貢献するための方策」に関し、行政と地域が意見交換を重ね貯蔵実験の取組に至った。

(1) かわたびコーディネーターからの提案

帯広開発建設部では、河川・ダムの広報や河川・ダムの取組に関心を持つ地域のキーマンとのネットワークの構築・維持を図ることを目的として平成30年から「かわたびコーディネーター」を設置している。帯広河川事務所では、この仕組みを活用し、かわたびコーディネーターとの意見交換を行うなどした上で、公共施設を有効活用する視点から、ダムでの飲食物の貯蔵実験を行うこととした。



写真-2 日高山脈と中札内村市街地

貯蔵対象とする飲食物としては、北海道開発局における先行事例を参考に、日本酒・ワイン等の酒類、日本茶（茶葉）、コーヒー豆等やこれらと類似のものを想定した。

(2) 中札内村と帯広河川事務所による検討

ダムを活用した飲食物の貯蔵実験は、先述した中札内村総合戦略の内「活力あふれる個性豊かな美しい村づくり」及び「美しい村らしい地域産業の振興と賑わいの創出」に資するものである。そのため、ダムが位置する中札内村と連携し、実施体制やダムを活用する事業者の公募、中札内村の地域活性化方策に関する意見交換を行い、実施体制を整えることとした。

その結果、貯蔵実験はダムのインフラストックを活用し、付加価値や地域性の高い商品開発及び地域振興を目的とし、中札内村、帯広河川事務所が実施主体となり事業者との調整や貯蔵実験を通じての熟成効果の検証や地域の商品開発等に関しての効果を測定する社会実験として実施する方向で調整した（図2）。

(3) ダムを活用する事業者の公募方法

実験に参加する事業者は令和4年3月より帯広河川事務所のHPで公募を行った。募集の対象は地域性のある商品開発等、地域振興に資することを目的とすることから、個人ではなく事業者または地域振興に取り組む団体を対象とした。貯蔵実験のためにスペースが確保できる条件においては事業者の募集は継続して行うものとしている。

中札内村総合戦略が掲げる4つの目標とその基本施策	
活力あふれる個性豊かな美しい村づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・観光資源を磨き、美しい村と「暮らす」人の創出・拡大 ・地域全体で支え育てる、次代を担う人づくり ・誰もが安心して暮らせる環境整備 ・健康まちづくりの推進 ・他の地方公共団体等との広域的な連携の推進
美しい村で「暮らす」人を応援	<ul style="list-style-type: none"> ・「中札内暮らし」に関する情報提供の充実 ・「中札内暮らし」を支援する施策の拡充 ・「中札内暮らし」を創出する住環境の整備
子どもを産み、育てやすい美しい村づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・男女が出会い、結婚し、安心して出産できる環境づくり ・子どもの健やかな成長・発達支援と育児不安の軽減 ・多様な子育て環境を支援する保育サービス等 ・子育て世帯の経済負担の軽減 ・子どもの遊び場の設備
美しい村らしい地域産業の振興と賑わいの創出	<ul style="list-style-type: none"> ・農業振興と地場産品の高付加価値化 ・地域産業の活性化 ・まちなかにぎわいの創出

表-1 第2期中札内村まち・ひと・しごと創生総合戦略

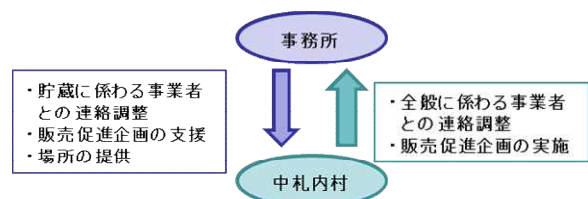


図2 貯蔵実験の実施体制

4. 貯蔵環境と貯蔵実験の状況

(1) 貯蔵場所の検討

貯蔵実験の開始にあたり気温や湿度などの条件を確認し、さらに、ダム管理に支障とならないことを前提条件として人の出入りなども考慮し、貯蔵実験に適した箇所を選定した。

その結果、気温、湿度ともに安定しており、通常は人の出入りもなく、広いスペースを確保できる堤頂の右岸リムトンネルを選定した(図3、写真-3)。加えて、ダムの見学者への取組のPR効果も期待して左岸の監査廊出口付近に設置しているダムギャラリーでも一部貯蔵実験を行うこととした(図3、写真-3)。ただし、ダムギャラリーはリムトンネルに比べてスペースが狭く、ダムの見学箇所となっているため人の出入りが多く、外気の影響をより受けやすく、リムトンネルと比べ気温、湿度が不安定であるため貯蔵実験を行う食品は少数にとどめ、基本的には、搬入のしやすさ、職員の負担軽減も考慮し、右岸リムトンネルを貯蔵実験のメインに使用することとした。

(2) 貯蔵実験の参加者

貯蔵実験の実施にあたり帯広河川事務所HPで公募により事業者を募った。その結果、コーヒー豆の貯蔵で地元、中札内村の「トカプコーヒー」、「ハレノヒ珈琲店」、「MayCoffee」及び音更町の「カシオペイアコーヒー店」の4事業者が参加し、令和4年度4月より貯蔵実験を開始している(写真-4)。更に、帯広市の「上川大雪酒造(株)十勝碧雲蔵」が日本酒を、コーヒー豆の貯蔵実験から関心を持った中札内村の「(株)十勝野プロマージュ」がチーズの貯蔵実験を同年9月から開始している(写真-5、6)

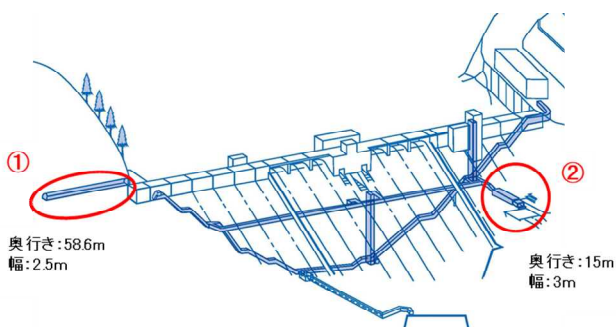


図3 貯蔵箇所図

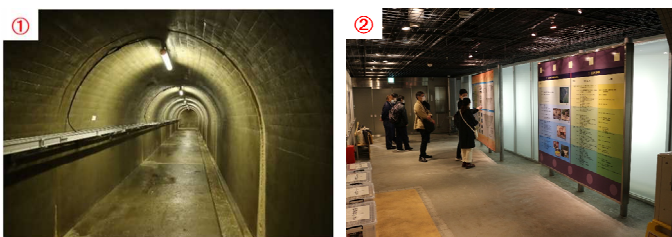


写真-3 貯蔵箇所図

(①:右岸リムトンネル、②:ダムギャラリー)

(3) 貯蔵実験の現状

貯蔵実験を行っている品目はコーヒー豆、日本酒及びチーズの3品目であり、それぞれの品目によって数週間から数年程度熟成を行い、搬入、搬出などの作業は事業者の手によって行っている。コーヒー豆は、長期熟成を行う生豆が60kg(15kg×4袋)と短期熟成を行う焙煎豆が6kg(3kg×2箱)、日本酒が720mL瓶で6600本、チーズがエダムチーズが28個(各800g)とゴーダチーズが16ホール(各4kg)が貯蔵されている。

熟成によってコーヒー豆では豆の風味が増し、まろやかな味わいになり、日本酒は熟成酒の味わいが出ると言われている。また、チーズは初期のミルクの風味が変化し、コクが増すと言われ、貯蔵実験により商品の価値の向上が期待されている。



写真4 コーヒー搬入の様子(令和4年4月12日)

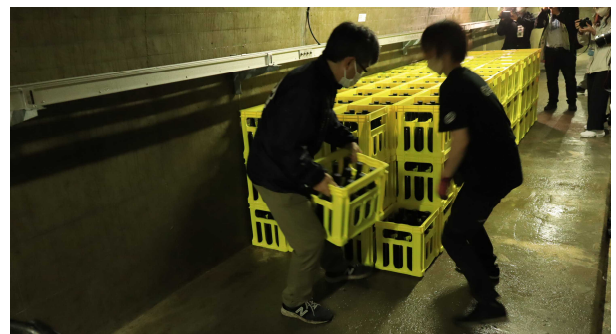


写真5 日本酒搬入の様子(令和4年9月30日)



写真6 チーズ搬入の様子(令和4年9月30日)

5. 貯蔵実験への反響

(1) 広報の取組とその効果

貯蔵実験の実施にあたり、多くの方に取組を知ってもらうためにプレリリースだけでなく、各メディアに個別紹介を行った。紹介の際には、よりメディアの興味を引きつけるようなデザインとなるように資料のデザインを工夫した。また、話題性を持たせ、メディアを飽きさせないためにも、桜を見ながらコーヒーを飲む「夕桜の会」や中札内村長による試飲会を開くなどの後続イベントを行った(図4)。継続的に広報を行った結果、コーヒーの貯蔵実験は民放の制作番組内で紹介された(令和4年7月22日、29日放送)(写真-7)。

また、貯蔵実験はかわたびほっかいどうの一環として実施しており、より多くの人に取組をアピールするため、インパクトを重視してダムで熟成したコーヒー豆を「かわたびコーヒー」と命名、ダム熟成コーヒーは、「かわたびコーヒー」の取組の第一弾として打ち出され、後に第二弾として川をイメージしてブレンドした「川ブレンドコーヒー」が打ち出されている。

積極的な広報の結果、実際にダム熟成コーヒーを提供している店でも多くの人から問い合わせがあるなど、広く取組が認知された。

(2) 教育・観光業への広がり

中札内高等養護学校より、校外学習の一環としてダムでの貯蔵実験に参加できないか照会があり、当方からの教育支援として実験の場を提供することとした。令和4年10月に生徒がコーヒー豆の搬入を行い、同年11月まで

の1か月間貯蔵実験が行われた。搬出後、取り出したコーヒー豆を用いて試飲会や検査機器を用いて糖度の測定が行われるなどの校外学習の機会となった(写真-8)。

また、令和4年10月には、旅行会社が主催する村長によるバスガイドツアーのコースに、ダム見学及びダムを眺めながらのコーヒーの試飲会が組み込まれた。ツアーの参加者からは、他にない体験をできたと好評を得ている(写真-9)。

このように、本来、活性化されると予想された産業以外の分野にも取組による効果が広がりを見せており、今後もさらなる発展が期待されている。

6. 今後への展望

今後は、コーヒー豆に加えて新たに貯蔵実験を開始した日本酒、チーズも併せて多方面に情報の発信を継続して行い、より地域に貢献できるように取組をさらに盛り上げていくこととしている。



写真7 番組収録の様子



写真8 中札内高等養護学校生徒による試飲会(実習)の様子



写真9 村長バスガイドツアーの様子
(左:中札内村長、右:帯広河川事務所長)

A poster for a coffee tasting event. The top left shows a landscape with cherry blossoms. The text reads '2022 5/2 MON 17:00-18:30 緊急決定'. The main title is '帯広川の夕桜 × ダム熟成コーヒー'. Below the title, there is a list of details: 【場所】Sakura Terrace(帯広市東8条南1丁目1-22) 【企画概要】 ● 礼内川ダムに約20日間貯蔵したコーヒー豆を“蔵出し”。 ● 熟成させたコーヒーを、帯広川沿いの夕桜とともに楽しむイベントです。 ○ 貯蔵実験に参加する4店(トコアコーヒー、ハレノヒコ珈琲店、MayCoffee、カシオペアコーヒー)それぞれが厳選した焙煎豆を使用します。 ○ 焙煎後の豆を用いた“短期熟成”を行うものです。 ○ 「礼内川ダム貯蔵実験」の中でも実験的な企画のため、日時限定、数量限定で開催します。 ○ コーヒーは、有料販売を予定しています。 ※ 後日、関係者のホームページ、SNS等で改めてお知らせする予定です。 At the bottom left is the logo for 'かわたび ほっかいどう' and at the bottom right is an illustration of a coffee cup.

図4 コーヒー試飲会の広告

中札内村では、ふるさと納税の返礼品の一部として「ダム熟成コーヒー」が利用されるなど取組に前向きな姿勢を示しており、今後は地域のブランドとして認知され、高付加価値化が図られ、ダムを活用した活力ある個性豊かな美しい村づくりや美しい村らしい地域産業と賑わいの創出が期待される。

ダムでの貯蔵実験は施策の初期段階にもかかわらず、既に自治体等との連携、観光活用、ダムの広報などによる成果が現れ始めている。また、今後は実験による効果のさらなる検証を行っていく。その際、いかにしてそれを実証するか検討していく。

さらに、実験終了の際に、事業者が継続してダムでの貯蔵を望むようであれば、それに向けて取組を継続的に行うための仕組み作りも必要となる。

加えて、貯蔵実験はその特性上、十分な効果を実証するには一定の期間を要するため、活動を持続的に行っていくためにも、事務所の職員が皆で楽しみながら取組むことが重要である。

今後の取組の継続的な推進にあたり、事業者、自治体、事務所が継続的に意見交換を行い連携を深めていくことが最も重要である。そのためにも三者が定期的に話し合いの場を設けられるような協議会の発足等も視野に入れ検討・調整を重ねていく。

7. さいごに

本稿では、帯広河川事務所におけるダムのインフラストックを活かした飲食物の貯蔵実験による地域活性化の取組を紹介した。

今回の報告は、まだ、取組の初期段階であるものの先に示したように様々な形で地域貢献に繋りをみせており、普段は利用されていないダムの施設の一部を効果的に活用することができた。それに伴い、事業者、自治体、事務所のつながりを創出し、地域産業の振興と活力ある村づくりに寄与することができた。引き続き、自治体や事業者と検討を重ね、取組を推進していく。

今後も帯広開発建設部ならびに帯広河川事務所では、関係機関との良好な協力関係を構築しつつ、魅力的な水辺の情報の発信及び水辺を活用し、北海道らしい地域づくり・観光振興に貢献する「かわたびほっかいどう」の取組を推進する。このことが第8期北海道総合開発計画の目指す「世界の北海道」への一歩となるものと考えている。

参考文献

- 1) 北谷沙紀子、大島省吾：札幌開建におけるコロナ禍におけるかわたびほっかいどうの取り組みの推進について、第65回（2021年度）北海道開発局技術研究発表会論文。